東風（あいのかぜ）に吹かれて（一）

珠洲・穴水・能登島

福野勝彦

春夏秋冬、霊峰白山を抱く加賀。宝達山を望む能登や高洲山の奥能登。怒濤逆巻き、時には凪ぐ日もある日本海。四季折々に、その姿を見せてくれる小鳥や動物に花たち。およそ二〇〇kmに及ぶ海岸線のある石川県は〝自然が豊かで魚が美味い〟とはいわれているが、そんな単純なものではない。

古代、渤海との交流の頃から、わがふるさとには先人たちが培ってきた歴史と豊かな風土に満ちあふれている。

北陸では昔から県民性を表すのに「越前詐欺に越中泥棒、加賀乞食に、能登はやさしや土までも」というのがある。その詮索は別として、世が〝平成の大合併〟に揺れ動き始めた頃から〝ふるさとを改めて見つめ直してみよう〟と、能登から加賀、時には越前や越中の各地を時間と空間の狭間に揺れ動く光と陰を訪ね歩けば、きっと何かがあるに違いないと歩いてみた。時は変わっても、まさに「疾風に勁草を知る」ではないかと思うからである。

しかたの風にキリコが招く

古代、渤海との交流の頃から、わがふるさとには先人たちが培ってきた歴史と豊かな風土に満ちあふれている。時間と空間の狭間に揺れ動く光と陰を追ってみた。

♪エンヤ、ヤッサ、ヨイットヤッサ
ハァー　しかたの風じゃー　ヨイヨーイ
おらの殿ま（男）の艫とり姿
波にゆられてゆらゆらと
おらは雇人　しかたの風だ
お日の入る場を待つばかり…

珠洲砂取節

砂取節は、珠洲市の馬緤海岸で毎年八月十三日に行なわれる「砂取節祭り」で唄われ、珠洲祭りの最後を飾る。

奥能登に昔から様々な文化を運び、今なお運んでいるのは「しかたの風（北北東の風）」。穏やかな時もあれば荒れる時もある。ハマヒルガオやハマボウフウ、ハマダイコンなどの花が咲いた海岸が美しい。

が、冬ともなれば一転する。

間垣は、雪や風から建物を守るためのもので、奥能登の外浦地区に固有の垣根だ。さらに、冬を彩る風物詩の一つは「波の花」。季節風に吹き寄せられた潮の泡が花吹雪のように空高く舞い上がり、幻想的な光景がひろがる。

ひぐらしが鳴く奥能登のゆきどまり

と詠んだのは、昭和三十六年に、この地を訪れた俳人の山口誓子（１９１０～１９９４）。

その行き止まりにそそり立つのは、狼煙の「禄剛崎灯台」。断崖には、１８８３年（明治十六年）にイギリス人の設計で造られた白亜の灯台。

ここでは日本海を隔てた先を示す〝上海一五九八

km、釜山七八三km、ウラジオストク七七二km〟、更に〝東京三〇二km〟というユニークな標識が目立つ。晴れていれば佐渡が見える。日本海を挟んだ、まさに国境の町だ。

江戸時代は菜種油で、狼煙を上げて航行する船を守ったという伝えが残る山伏山（一八四m）。

およそ八百年余り前、奥州平泉へ向かっていた義経（１１５９～１１８９）主従のうちの一人、家来の常陸坊海尊が、この山に留まり、仙人となった。で、山伏姿で住み着いたことから山伏山といわれるようになったとの説もある。

寺家須須神社の奥の宮もあり、スダジイやツバキを見ながら一時間もあれば行ってこられる。

麓の創建二千年という歴史のある須須神社。この地を訪れた直木賞作家・村上元三の句碑は、鳥居をくぐった近くにある。

義経は　雪に消えたり　須須の笛

村上元三

境内は、幹の廻りが二mを超える数十本のケヤキの大木やタブ、スダジイなどが太古の姿をそのまま残した広葉樹の森に囲まれている。

頼朝に追われて奥州平泉へ逃げる途中に時化に遭った源義経が〝三崎権現〟に祈願して奉納したという「蝉折れの笛」、高麗笛一管と弁慶が寄進したという「左」という銘入りの守刀も添えられている。

この三崎町寺家。九月十三～十四日に行なわれる秋祭りには、県木アテで作られた日本一という総漆塗りの一二～一五mもある大キリコ四基が練り歩く。

白波のうち驚かす岩の上に
寝らいで松の幾夜経めらん

時忠

平時忠（１１２７～１１８９）及び其の一族の墳墓は大谷町の大谷峠、国道２４９号線沿いから桜並木の続く崖下にあり竹垣で覆われている。一番大きい墓が時忠のものといわれ、その古さから、時の流れが感じられよう。

能登国へ流罪となった時忠。〝傲れる者は久しからず〟という平家物語冒頭の一節は、時流に乗り、まさにやりたい放題の限りを尽くして傲り高ぶった時忠への言葉なのかもしれない…。

我が思ふ　人は波路を隔てつつ
心幾度　浦つたふらむ

能登の配所で詠んだ句にも、心情を読み取ることができるというものだ。能登の暮らしも三年余の月日を経た１１８９年（文治五年）年二月に、六十二歳で鬼籍に。

配所であった則貞と、輪島は曽々木の岩倉山（三五七ｍ）山ろくにある時忠の子ども、上下の時国家は、時忠の末裔の代になる。

時国や時康（則貞）が平の姓を名乗り続けることに不都合を感じて、実名を姓とした一族が居住した場所で、茅葺きの佇まいが今も残る。

全国各地で、多くの平家落人伝説が広がっているが、能登の国道２４９号の沿線には、平家一族の歴史があるというものだ。

まいもんと鋳物の里

♪新艘つくりて　松前下る
積んだ荷物は　中居釜
荷物は積んだ
積んだ荷物は　中居釜…
中居たたら唄

かつては、北の大地、蝦夷松前などへ鋳物を運ぶ「北前船」で賑わった中居。

一年を通じて波穏やかな穴水湾。七浦七入りと呼ばれるリアス式海岸の入り江。

昭和の初め、麦浦地区で始められたカキの養殖は年を追うごとに盛んになり、今や中居や志ヶ浦一帯は養殖筏が目に入り、イサザとともに観光穴水を彩る。

火星の研究者として知られる米国は、ボストン生まれで、無類の日本研究家パーシヴァル・ローエル（１８５５～１９１６）。

頃は、１８８９年（明治二十二年）三十四歳のことだった。来日三

度目のことである。

穴水はローエルの能登旅行の終着点で、終着港だった。櫓で漕ぐ小船に乗せられて、水路の尽きる所で上陸、そこが穴水。

「運河のある地方のように狭く入り組んだ地形のためか、…それともこの風景を包む大気のせいか、私にはふっとオランダの風景を思い起こさせた」と『ＮＯＴＯ能登・人に知られぬ日本の辺境』（ローエル著宮崎正明訳・著）で当時の情景を書いている。

平安から大正時代までのおよそ八百年間、鋳物の里として栄えた中居地区には、その繁栄を偲ばせる寺院や神社が数多く存在する。

１５８１年（天正九年）に七尾への入府を果たした利家は、上杉軍との戦いで、魚津にいた長連龍を急遽帰国させ、所口（七尾市所口町）城代の前田安勝とともに上杉軍が占領した棚木城（穴水町）を攻撃。

この時、利家は、生け捕りにした捕虜を釜煎りにするための大釜を中居の鋳物師・三右衛門に鋳造させるよう指示、つまり能登の住民で、上杉方についた者を全員殺害するよう厳命した歴史も忘れてはなるまい。

中居の鋳物は、長い歴史的な変遷の中で、鋳物の生産と消耗が繰り返されて、１９２４年（大正十三年）に廃絶に至ったらしい。

長閑な中居湾も一転して騒がしく、物々しい雰囲気になったのは、日本の敗色が濃厚となっていく１９４４年（昭和十九年）の春から、翌年の夏にかけた頃だ。一〇〇〇ｔ以上のイ号型や一〇〇〇ｔ以下のロ号型の潜水艦が次々と入ってきたのである。

更に米軍によって投下された機雷を除去する海防艦が並び、沖には潜水艦が浮かんでいた。敗戦間近い、六月には、広島の海軍大竹潜水学校の分校が開校したが、前年から訓練生や教官らおよそ千人が移ってきた。

中居や波志借、穴水などの十四ヶ寺や民家に分散して練習を開始。戦況も厳しい頃で、訓練生たちは練習の合間に防空壕も掘っていた。

数年前、かつての練習生ら五十人余りが、戦没者の五十回忌法要に訪れ、読経の後、「海ゆかば」を

歌ったという。歴史に終わりはない。静かな比良や中居にも、様々な人生模様がある…。

流人と火まつりの島

鳥総立て舟木伐るといふ能登の島山
今日見れば木立繁しも幾代神びそ
万葉集　巻十七―四〇二六

家持が、越中に国守として赴任したのは、746年（天平十八年）の旧暦七月半ば頃だった。当時は、能登から佐渡へかけての領域が、朝廷の統治が及ぶ日本海側の北限。能登半島は交易や軍事などで東国へ向かう船にとって、安全に物資補給などで寄港できる重要拠点だった。

その意味において能登をいかに掌握するかは当時の朝廷にとっては重要な課題であった。

歌の中の「とぶさ」は梢の部分である。これを切り株の上に立て、山の神を祀ってから、材木として使用する習俗によるものとみられている。樹木に宿っていた精霊を、この「とぶさ」に移らせ、さらに他の場所へ移す目的の神事ではないか。

さて、勇壮な奉灯祭りで知られる七尾の石崎と能登島とを結ぶ橋が「能登島大橋」である。昭和五十七年の四月三日に開通。長さが一〇五〇m、海面からの最大の高さは、およそ二五mである。

この橋のできる以前は、陸の孤島だったと言っても言い過ぎではなかろう。それまではポンポン船、そして昭和四十年代に佐波の波止場から七尾港への鋼鉄製のフェリーが唯一の足だった。橋が架かり、これで能登島は、離島に別れを告げた。

開通から十六年、島内外から高いと不評をかっていた一七六〇円の通行料金は、平成十年七月一日からようやく無料化された。能登島への旅はこの橋を渡ることから始まる。

毎年七月三十一日に行なわれる「向田の火祭り」。日本三大火祭りの一つといわれる。男衆が、神社から奉灯を担ぎ出し、手で松明を投げつけて高さ三〇mもの大松明に点火する。火柱となって燃えさかり、燃えつきた松明の倒れた方向によってその年の豊漁、豊作を占う。佐渡の女姫と能登島の男神と年に一度のデートだと言う説もあり、何ともロマンチックだ。

島の祭りについてはもう一つ。向田地内の愛宕神社で行なわれる「蛸祭り」。毎年十月の十七日と十一月三日の二回ある。古老によると、三百年の昔、神様（火の神）が、アイ（饗）の風（北東風）に吹かれて蛸に乗って向田の「サブロスケのツキジマ」に漂着して、カマドの上に現れたという。これが十一月三日の朝の出来事であったそうだ。惜しいかな、この珍しい神事も今やお参りだけになってしまった。

島は離島であるがゆえに江戸時代には、加賀前田藩の流刑の地でもあった。最も重い罪は、越中五箇山だが、能登島へは加賀藩の政治を批判した武士などが主だった。中には百姓一揆の首謀者や取り立てが悪い十村役などもいたという。

島流しの歴史は１６３８年（寛永十三年）の人持組頭安見隠岐に始まり、流刑罰が廃止された明治までの二百三十余年間に百十三人が確認されている。

大坂の役（１６１４～１６１５）で活躍した隠岐は、味方討ちといわれて、加賀藩の武道に傷が付くといって流刑に。在島十年余で亡くなっている。

寺島蔵人（１７７７～１８３７）は、禄高四百五十石の中級武士として加賀藩に仕え、改作奉行、大阪御借財御仕法主付など農政や財政の実務をこなしていた。

１８２４年（文政七年）十二代藩主前田斉広が、有能な藩士を抜擢して、教諭方という藩政改革のための親政機関を設置。蔵人も、その一員に加えられ

たが、斉広の急死で教諭方も解散してしまうことになる。

蔵人は手腕家であると同時に生来、思いやり深く正義感の強い人であったという。このため、斉広死去した後の藩の重臣の政治に納得がいかず、ことごとく対立した。それで、１８３７年（天保八年）には、能登島へ流刑となり、その半年後に、この島で波乱に満ちた生涯を閉じた。

天保の飢饉で、村人が苦しんでいた様子を絵入りの日記風にまとめた「島ものがたり」を残している。

島の鉢ヶ崎地内には、蔵人が流された場所、配所址の看板が建てられており、時折訪れる人もある。

蔵人は画人としても知られ、王梁元、応養と号し、秀作を多数残している。

福野　勝彦（ふくの　かつひこ）
昭和18年4月羽咋市生まれ。羽咋高校、早稲田大学大学院修士課程（政治）修了。昭和44年石川テレビ入社。記者、デスク、ディレクター、チーフプロデューサー。平成17年石川テレビ退社。金沢龍馬会会員、日本山岳会会員。著作に「悲劇の希望の大地」「北の大地、樺太彷徨」など